

# 音声Ⅱ

沖浜

指定テキスト『日本語音声学入門』or『日本語の音声入門』  
『よくわかる言語学入門』第2章

- 1) 音声Ⅰの確認……音声と音韻
- 2) 音声Ⅰのおさらいドリル
- 3) 音声の物理的側面（『日本語音声学入門』p.149~）
- 4) 第二言語学習の何が難しいか……目標言語と母語の単音および音素の対応関係
- 5) 日本語（東京方言等）の話し言葉の主な変音現象
- 6) アクセント聴解の基礎練習……聴解の予備練習
- 7) 音素設定に関して
- 8) 弁別素性（『よくわかる言語学入門』第2章）
- 9) 超分節的特徴についての音声Ⅰの補足  
……アクセントのダウンステップ、プロミネンスとイントネーションについて、  
ポーズ、スピードetc.
- 10) パラ言語とは
- 11) 検定過去問による聴解の練習
- 12)（時間が余れば）世界の諸言語の音素について

\*\*\*\*\*

## 【検定過去問を解く上での注意点】

問題を解く上で、選択肢の文言に惑わされないこと。

以下の各行は同じことを表している。

鼻音か口音か＝鼻音化の有無＝鼻腔の関与（の有無）＝口蓋帆の位置

無声か有声か＝声帯振動の有無＝声門の状態＝声帯接触の有無

母音について：口腔が狭くなる＝舌が上昇する

口腔が広く（大きく）なる＝舌が下降する

促音の挿入＝子音の調音時間（が長くなる）→音節が長くなる

撥音の挿入＝鼻音の調音時間（が長くなる）→音節が長くなる

引音の挿入＝母音の調音時間（が長くなる）→音節が長くなる

## 2) 音声Ⅰのおさらいドリル

※どの問題も解答の書き方は複数あり得る。

問1 以下のような現象を何と呼ぶか。

- |                              |                  |
|------------------------------|------------------|
| ① /N/→ {konnaN}              | ② /b/→ {bjiko:}  |
| ③ /ko/+{sakana}/→ {kozakana} | ④ /a/→ {nānakai} |

問2 問1の①～④のうち「→」の前後の対応関係が一つだけ違うものを指摘し、その違いを説明しなさい。

問3 以下の各組(a～d)の共通点を指摘しなさい。

- |                            |                           |
|----------------------------|---------------------------|
| ① a {ϕ} b {h} c {ʃ} d {f}  | ② a {m} b {b} c {β} d {p} |
| ③ a {pj} b {t} c {k} d {d} | ④ a {ŋ} b {m} c {n} d {ŋ} |
| ⑤ a {m} b {N} c {b} d {ɔ̃} |                           |

問4 以下の各組の相違点を指摘しなさい。

- |             |             |
|-------------|-------------|
| ① {p} と {b} | ② {p} と {ϕ} |
| ③ {n} と {ŋ} | ④ {z} と {z} |
| ⑤ {g} と {ŋ} | ⑥ {i} と {j} |
| ⑦ {u} と {w} |             |

## 5) 日本語（東京方言等）の話し言葉の主な変音現象

### ①音の脱落

あらゆる言語に頻繁に現れる。②以下も広い意味の脱落によって起きる。  
特に語頭の狭母音や半狭母音、/a/に挟まれた半母音、母音連続における狭い方の母音は脱落しやすい。

### ②長母音→短母音

引音の脱落とも説明できる。

ほんとう → 「ほんと

※逆に、強調などのため長母音化することも多い。簡単→「カンターン」

### ③拗音の直音化

「シュ→シ、ジュ→ジ」は江戸語の特徴ともされる。

ゆしゅつ（輸出）〔juʃutsu〕→「ゆしつ」〔juʃitsu〕

※「客死する」を「きゃくし/かくし」と二通りに読むのは**語形の揺れ**とされる。

### ④促音化

母音の無声化がさらに進むと母音の口の構えを1モーラ保つことがなくなり、母音が消える。

旅客機 りよきやくき〔rʲokʲakukʲi〕→リョカッキ〔rʲokʲakkʲi〕

※「的確」を「てきかく/てっかく」と二通りに読むのは**語形の揺れ**とされる。

### ⑤撥音化

※母音が脱落して鼻音が残るか、鼻音化する。「～ませぬ→～ません」のように、現代語では規範的な形とされるものと、口語的なもの、俗語的な印象が強いものがあり、日本語教育では注意が必要。

～のです〔-nodesu〕 → ～んです〔-n̄desu〕

私のうち〔satafinou̯ɸi〕 → わたしんち〔satafin̄ɸi〕 ou̯が脱落。

そこのところ → そこんところ（口も脱落すればソコントコになる）

わからない〔wakaranai〕 → わかんないの〔wakan̄nai〕 aが脱落しrが歯茎鼻音に。

ものだ → もんだ

### ⑥縮約形

※「では→じゃ」のようにやや改まった場面でも使えるものと、強い俗語的な印象を与えるものがあり、日本語教育では注意が必要。

ている→てる、ておく〔teoku〕→とく〔toku〕……単純な母音脱落で拍数減少。

～ては〔tewa〕→～ちゃ〔ɸa〕

～では〔dewa〕→～じゃ〔ʒa〕

### ⑦その他

「あまり→アンマリ」のような撥音挿入による拍の増加もある。

「とりはらう→トッパラウ」のように、促音化と半濁音化が同時に起きるものも。

これらの多くは**俗語形**として固定されている。

## 7) 音素設定に関して……音声 I より少し詳しく

以下の各モーラの音価は〔 〕に示すものであるとする。  
また、音素は/ /に示すように記述するとする。

か〔ka〕 /ka/	きゃ〔kia〕	/kja/または/kyɑ/
さ〔sa〕 /sa/	しゃ〔ʃa〕 または〔ca〕	/sja/または/syɑ/
ま〔ma〕 /ma/	みゃ〔mja〕	/mja/または/myɑ/
や〔ja〕 /ja/または/ya/		

上記の音素の分け方には主に二つの流儀がある。（同色のものを一つの音素とみなす）

### 【分け方①】

か/kɑ/	きゃ/kja/	
さ/sɑ/	しゃ/sja/	
ま/ma/	みゃ/mja/	
や/jɑ/		音素の種類は、子音音素3種、半母音音素1種、母音音素1種。

### 【分け方②】

か/kɑ/	きゃ/kja/	
さ/sɑ/	しゃ/sja/	
ま/ma/	みゃ/mja/	
や/jɑ/		音素の種類は、子音音素7種、母音音素1種。

また、「長母音音素」を設定し、次の赤太字の部分をも一つの音素とみなす考え方もある。この流儀で分けると、日本語の母音音素は10種になる。〔oba:saN〕

## 9) 超分節的特徴について 音声 I の補足

※「続き上がり、続き下がり」は、音声 I でも扱ったが、文節と文節が意味的に密接に結合することで後続する文節のアクセントパターンが消え、アクセントの上で一つの文節のようにまとまる現象のこと。（仮に「続き上がり、続き下がり」と呼んでおくと、名称は定まっていない）

- (1) ツノカゼ ←続き上がり。「名詞+の+名詞」は密接な連文節を作りやすい。  
ナ
- (2) ア  
キノカゼ ←続き下がり
- (3) ツノア  
ナ メ ←単純に2つの文節が繋がったように見えるが、ノが下がっていない。
- (4) ツ ク  
ナ ガ ル ←ツにアクセント核があるので助詞のガで下がっている。
- (5) ア  
ア  
キノ メ ←ダウンステップ。後続する文節のピークが低くなる現象。

(6) ア

キノア ←ダウンステップと続き下がりの複合同も考えられる。雨のアが上がらないのにメが下がる。  
メ

※特別な発話意図がない場合、文頭では声がやや高く、文末に向けて徐々に声が低くなり、アクセントの高低または強弱の差も小さくなっていく現象は、世界の多くの言語で観察される。

※「ダウンステップ、アップステップ」の語は複数の定義で使用される。ここでは(5)のような現象を仮にこう呼んでおく。

※ダウンステップは後続の文節のアクセントのピークを低くするが、ボトムはあまり低くならない。したがって、文末に向けて下降しながら、次第にアクセントの高低差（ピッチの振幅）が小さくなっていく。

また、「フォーカスによるダウンステップの阻止」が観察される。つまりプロミネンス（フォーカス）が置かれた文節は低くならない。

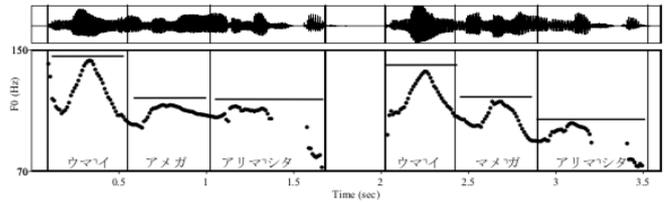


図1 ダウンステップ。

左の発話は「旨い飴がありました」、右の発話は「旨い豆がありました」。縦の点線はアクセント句境界を表す。各アクセント句のピッチレンジの上限を水平方向の実線で示している。発話者は第1筆者。

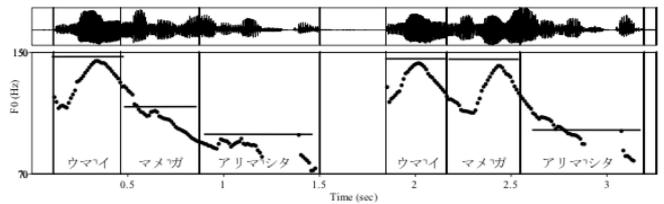


図2 フォーカスによるダウンステップの阻止。

発話は左右とも「旨い豆がありました」。左の発話は「旨い」に、右の発話は「豆」にフォーカスが置かれている。縦の点線はアクセント句境界。水平方向の実線はピッチレンジの上限。発話者は第1筆者。

ダウンステップは、アクセント句のF0ピークを低下させるが、F0ボトム（ピッチレンジの下限）はあまり低下させない（前川1998）。このため、アクセント句のピッチレンジ（F0ピークとF0ボトムの差分）は、有核句が先行することにより反復的に縮小することになる。以降、F0ピークを低下させるだけでなく、ピッチレンジを縮小させるダウンステップを「狭義のダウンステップ」と呼ぶことにする。

## 10) パラ言語とは

パラ言語(周辺言語, paralinguage)とも。

通常は音声言語に関して、（正書法での）文字化はできないが言語に付随して周辺的情報を伝達する要素を指す。

常識的には、プロソディのうちアクセントは含めず、イントネーション・プロミネンス・ポーズ・速さ・インテンシティ（強勢。特定の語などを強調して発音する）・咳払いや舌打ち・声質・音量・間合いや沈黙・フィラー（考える時間稼ぎや応答として挟む「ア〜」など）etc.を指す。

**注意!** 「うん、ああ、そう」等、感動詞として発した場合には、パラ言語ではない。

※ 声質が弁別の特徴である言語も、余剰の特徴（意味の区別は示さない）ではあるが一定条件でほぼ必ず特定の特徴的な声質が使われる言語も、存在する。IPAには「息漏れ声、軋み声」を示す補助符号がある。

会話中の身振りと身振り言語・姿勢・顔の表情・パーソナルスペースの調整・身体接触etc.もパラ言語に含める立場もあるが、通常は非言語的要素とする。

パラ言語や会話中の身振り等の非言語的要素は、言語社会によって、また世代や階級などのサブ社会集団によって、現れやすい特徴や意味づけが異なる。

藤崎博也(1996)は、音声言語に含まれる情報を「言語的/パラ言語的/非言語的」の3種に大別し、話者が意図的に送る情報ではないもの（感情や個人の特徴等）は非言語的情報であるとした。